

North East Think Tank

1995.3

# NETT

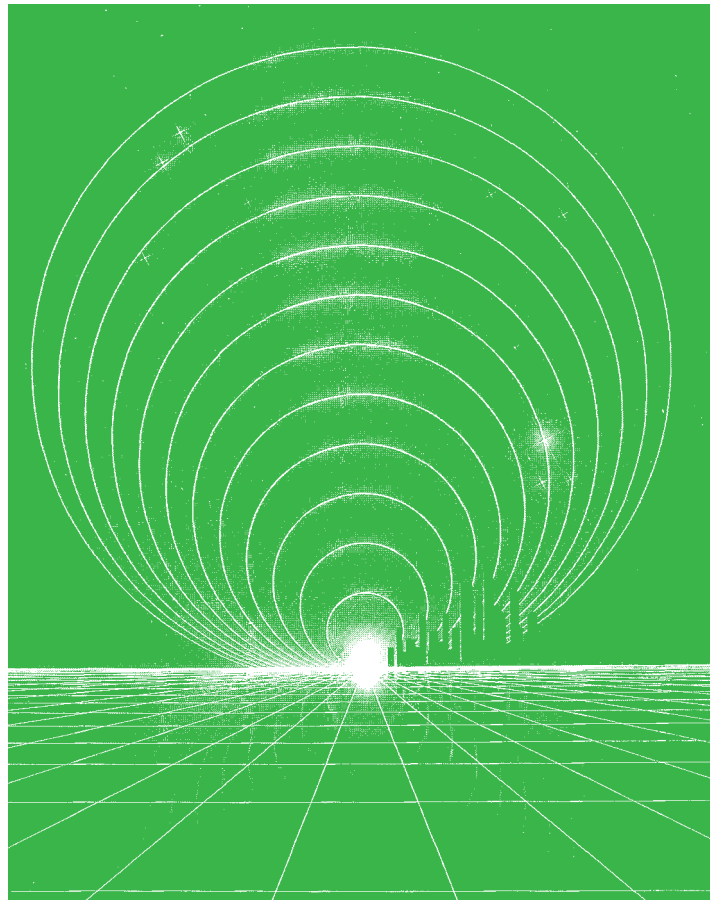
---

---

No. 10

◇特集◇

## UJI ターン



ほくとう総研

# CONTENTS

## もくじ

1 ……羅針盤

U J I ターンの推進

国土庁地方振興局長 松本 英昭

---

### 【特集】 U J I ターン

2 ……U J I ターンに関する調査結果の概要

国土庁地方振興局地方都市整備課

課長補佐 横山 均

6 ……国土庁募集「わたしのUターン・Iターン体験記」および

「UターンやIターンを進めるためのわたしの提案」優秀賞

『「人の魅力」が支えるIターン』

山形県高島村 河原 俊雄

『地方での起業の可能性について』

富山県山平村 石島 正一

『住めば宮古・離島Iターン奮闘記』

沖縄県上野村 井口 千景

『星に魅せられて』

広島県蒲刈町 篠永 浩二

---

### 【連載】

15 ……「価格破壊の現場」(2) 泡立つビール販売前線

日本経済研究センター首席研究員 武藤 博道

17 ……ほくとう日本のひとびと(7) 札幌農学校の人々

ほくとう総研理事長 窪田 弘

---

### 【コラム】

19 ……リレーエッセイ 「ヤーさんの思いで」

豊平製鋼株式会社 相談役(前社長) 斎藤 達

---

### 【ほくとう総研】

20 ……ほくとうDIARY・事務局から

……………編集後記



# U J I ターンの推進

国土庁地方振興局長 松本 英昭



近年、生活のゆとりや生きがいを求めて東京などの大都市地域から生活の本拠を地方に移すことを考えている人たちが増えています。東京圏（1都3県）における人口の転入・転出の状況についてみると、従前は東京圏への転入超過が続いていましたが、平成5年度に初めて東京圏からの転出超過に転じるなど、大都市住民の地方回帰の兆しが現れているように思えます。地方公共団体においても、地域活性化を図り、また、U J I ターンに関する相談の増加等に対応するため、東京にU J I ターン相談窓口を設置している道県が、昭和63年以前の7道県から平成元年以後の38道県に急増しているなど、U J I ターン施策の推進の高まりがみられます。

昨年6月に国土審議会調査部会が取りまとめた四全総総合的点検作業の最終報告においても、U J I ターンなどの人口の定住促進を図るとともに、人的交流の増加を目指した地域づくりを推進していくことが、今後の重要な課題として取りあげられています。大都市住民の地方回帰の兆しをより確かなものとするためには、地方公共団体においては、①それぞれの地域のもつ自然環境、歴史的・伝統的文化、産業などの個性や独自性を再認識すること、②創意工夫をいかした地域づくりを積極的に推進すること、③ゆとりと生きがいのある定住や交流の場を形成すること、④地域の有する多様な魅力について大都市住民の再認識を促すことが必要であると考えております。

しかし、大都市住民には、地方についての情報不足などにより、依然として地方生活に対する誤解や不安があるように思えます。また、U J I ターン施策を効果的に実施するには、多くの行政分野と連携しながら地域の特性を生かした施策を展開するとともに、U J I ターン担当者の相互交流を深めることがもともとめられていますが、国の機関相互の連携や地方公共団体の各部局相互の連携が十分でなく、地方公共団体相互の連携に至ってはほとんど行われていない状況です。

国土庁では、昨年9月中旬に、U J I ターン志望者にヒントや励ましを提供する観点から、U J I ターンに係る体験記と提案の募集を行い、10月末まで201編の応募を得ました。作品の一つ一つに、応募された方それぞれの人生や人生観が見事に表現されており、大変感動いたしました次第です。

また、本年1月には、道府県のU J I ターン相談窓口の現状・課題、利用者の状況、道府県の施策の状況、U J I ターン者の実態等を把握し、今後のU J I ターン施策に資することを目的として実施した「U J I ターンに関する調査結果」を公表しました。また、地方公共団体のU J I ターンや地方定住の担当者、U J I ターン者の連携・交流を図るため、初めて「全国U J I ターン・定住シンポジウム」を山口県で開催しました。同シンポジウムにおいては、U J I ターンに係る体験記と提案の優秀賞の受賞者の発表・表彰のほか、基調講演、パネルディスカッション、情報交流会、分科会、現地視察などを実施しました。

さらに、2月には、東京圏の居住者に、地方の魅力を訴え、U J I ターンのきっかけをつかんでもらい、「新しいふるさと」を見つけてもらうという趣旨で、初めて「ふるさと探しフェア」を新宿で開催しました。41の地方公共団体等が出展し、ポスター、パネル、パンフレット、パソコン、ビデオ、資料等を活用して、当該地域に関する就職、生活、住宅、観光・レジャー、歴史・文化、就農等のU J I ターン情報を提供するとともに、カウンセリングを行い、2日間で約5,000人の来場者を得ました。さらに、情報交流会を開催し、U J I ターン相談窓口の担当者、地方公共団体のU J I ターンの担当者の連携・交流を図りました。

国土庁としては、今後とも、関係省庁等と連携を図りながら、U J I ターンの定量的・定性的な目標の設定、情報のネットワーク化、総合的な情報を全国的規模で提供する体制の在り方など、U J I ターン促進のための施策について調査検討に努めるとともに、地方公共団体のU J I ターンの取組に対して積極的に支援して参りたいと考えております。

# UJIターンに関する調査結果の概要

国土庁地方振興局地方都市整備課

課長補佐 横山 均

## 1. 趣旨

東京圏への一極集中を是正し、地方の活性化を図るために、国及び地方公共団体は、UJIターン施策を展開している。大都市住民においても、価値観の多様化から地方都市での生活を再認識する動きも高まりつつある。このような背景のもとで、平成5年11月から6年3月にかけて、今後のUJIターン施策に資することを目的として本調査を実施した。

## 2. UJIターン相談窓口の現状と課題

現在、東京には、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県及び沖縄県を除く38道県（以下「県」という）がUJIターン相談窓口を設置している。また、京都府及び兵庫県は、東京事務所においてUJIターンに関する資料提供を行っている。これらの40道府県についてアンケート調査を行った。

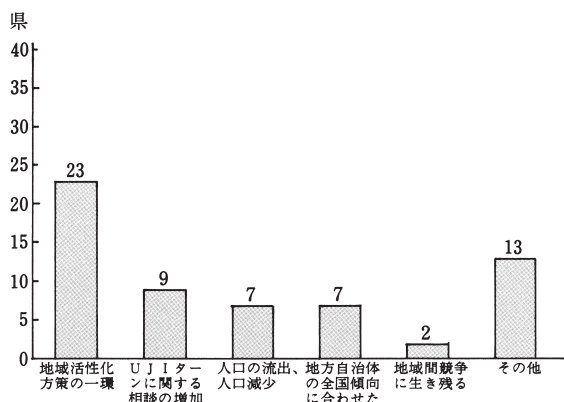
(1) 東京にUJIターン相談窓口を設置した経緯についてみると、「当該地域の活性化方策の一環」が23県と最も多く、次いで「UJIターンしたいという問い合わせが増えた」が9県である(図表1参照)。また、設立した時期についてみると、平成2年が14県と最も多くなっており、平成元年以降に31県が設置している(図表2参照)。

(2) 相談窓口の受付日については、「平日のみ」が33県、「平日と土曜日」が5県となっている。受付の時間帯については、「午前9時頃に開始し、昼休みに1時間休止し、午後5時頃に終了する」のが一般的である。設置場所についてみると、道府県会館が14県と最も多く、次いで国際観光会館内が12県となっており、大部分はこれらの施設の一部にコーナーを設けており、独立した窓口を設けているのは5県である。

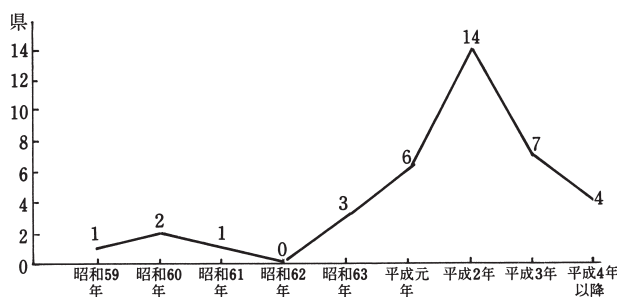
相談窓口の担当者の数についてみると、「1人」が25県と最も多い。また、正職員が担当している窓口は19県である(図表3参照)。

(3) UJIターン希望者に対する登録制度を設け

図表1 設置の経緯(複数回答)



図表2 設立時期

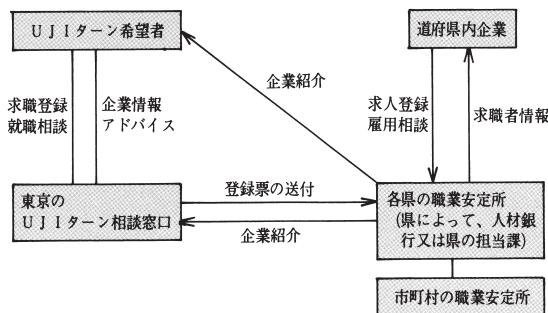


図表3 担当者数

人数	県	構成 ( )は県数
1人	25	正職員1人(8)、嘱託1人(17)
2人	7	正職員2人(2)、正職員と嘱託(3)、嘱託2人(2)
3人以上	6	正職員4人と嘱託1人(1)、正職員1人と嘱託3人(1)、正職員3人(1)、正職員2人と嘱託1人(1)、正職員1人と嘱託2人(2)

注) 窓口としての対応なし2県

図表4 UJIターン相談窓口の一般的な業務の流れ





ている相談窓口は、34県である。登録制度とは、U J I ターン希望者が、名前、連絡先、就職したい職種・地域などを相談窓口に登録しておく、相談窓口から当該県の職業安定所にその登録票が送られる。U J I ターン希望者の要望にあった企業があれば、職業安定所から相談窓口を通して、又は直接U J I ターン希望者に職業を紹介するというシステムである（図表4参照）。U J I ターン登録者数は、県により格差があるが、平成3年度から5年度にかけて増加している。

- (4) U J I ターンフェアや会社紹介フェアに開催・参加したことがあるのは、31県である。その結果・効果についてみると、「登録者が増えた」が22県と最も多く、以下「電話照会が増えた」が16県、「来訪者が増えた」が13県、「U J I ターン者が増えた」が12県となっており、U J I ターンに対する関心を高めている。
- (5) 相談窓口のPRの方法についてみると、「職業安定所にパンフレットを置く」が24県、「雑誌や新聞での広告」が24県、「キャンペーン、フェアなどへ参加」が23県、「企業や大学、役所などへのパンフレットの配布」が20県となっている。
- (6) 相談窓口への相談件数は、県により格差があるが、平成3年度から5年度にかけて相談件数が増加している。最も多い相談の内容についてみると、「求人状況、会社案内など就職に関すること」が37県となっている。2番目に多い相談についてみると、「住宅事情や物価など、住環境に関すること」が19県、「景気動向など経済状況に関すること」が16県となっている。
- (7) 国に対する要望については、「資金援助」が16県、「情報の提供やアドバイス」が13県、「各地方自治体で実施している事業などの紹介」が12県となっている。

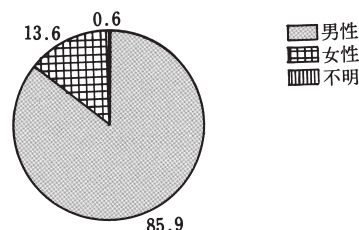
### 3. 各道府県のU J I ターン相談窓口の利用者の状況

平成5年11月にU J I ターン相談窓口に来訪した354人に対して調査を行った。

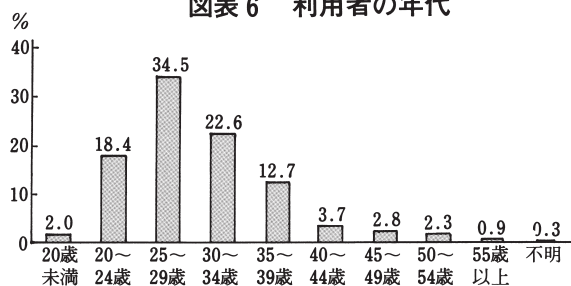
- (1) 354人の属性についてみると、性別では男性が85.9%と多く、年代では20歳から34歳の青年層が4分の3を占め、家族構成では一人暮らしが53.1%を占め、仕事では勤め人が68.6%と多く、居住形態では借家が84.5%となっている（図表5、6、7及び8参照）。また、Uターン意向者は

72.1%、Iターン意向者は27.1%となっている。

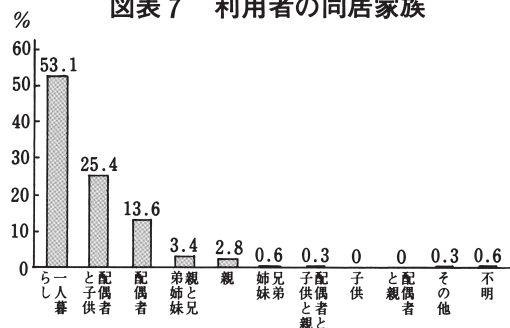
図表5 利用者の性別



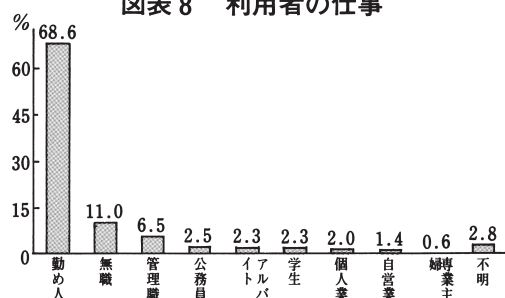
図表6 利用者の年代



図表7 利用者の同居家族



図表8 利用者の仕事

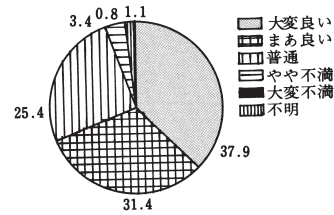


- (2) 相談窓口に来訪した理由をパターン別にみると、「地方都市で暮らしてみたい」、「地方都市で仕事がしてみたい」などの「積極的U J I ターン志向」が48.0%と最も多く、以下「どうしても故郷に帰らなくてはならない」などの「消極的U J I ターン志向」が34.2%、「家族の者が地方都市の生活を望んでいる」などの「依存的U J I ターン志向」が13.5%となっている（図表9参照）。

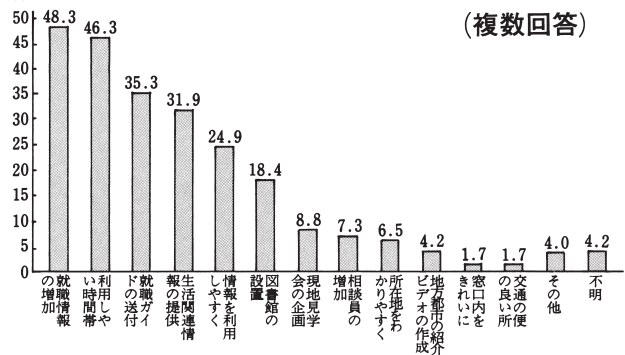
- (3) 相談窓口を知った媒体についてみると、「雑誌」が52.8%と最も多く、以下「友人や家族からの話」が22.0%となっている。
- (4) 相談窓口に来訪した感想についてみると、「大変良い」が37.9%、「まあ良い」が31.4%、「普通」が25.4%となっている（図表10参照）。相談窓口に対する要望についてみると、「就職情報を増やしてほしい」が48.3%、「会社帰り、休日などに利用しやすい時間帯にしてほしい」が46.3%と多く、以下「UJIターンフェアや就職ガイドの案内を送ってほしい」が35.3%、「住宅情報や生活関連の情報がほしい」が31.9%、「情報を利用しやすくしてほしい」が24.9%となっている（図表11参照）。
- (5) UJIターン及び地方都市などの生活に関する情報をどこから得ているかについてみると、「新聞・雑誌」が61.3%と最も多く、以下「親や友人・知人からの話」が43.8%、「職業安定所」が18.9%となっている。
- (6) 地方都市で生活する際に重視することについてみると、「自分に合った仕事の確保」が85.6%と最も多く、以下「広くて安い住宅の確保」が38.1%、「気候・風土になじみやすい」が30.5%、「子供の教育環境の良さ」が26.3%、「その地域特有の慣習や人間関係になじみやすいこと」が25.4%となっている（図表12参照）。
- (7) UJIターンに対して家族が反対した時の対応についてみると、「何とか説得して家族で行く」が64.7%と最も多く、以下「あきらめて都会で暮らす」が11.9%、「自分一人で行く」が9.0%となっている。
- (8) UJIターンをした時の賃金の低下についてどの程度まで許容できるかについてみると、「20%ダウンまで」が47.2%と最も多く、以下「10%ダウンまで」が35.3%、「30%ダウンまで」が12.7%となっている（図表13参照）。

「10%ダウンまで」が35.3%、「30%ダウンまで」が12.7%となっている（図表13参照）。

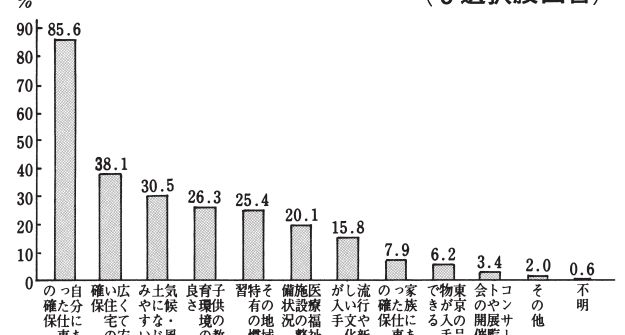
図表10 来訪した感想



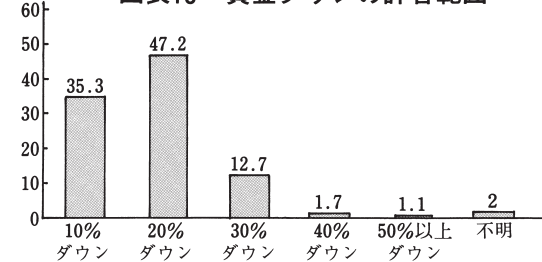
図表11 UJIターン相談窓口への要望



図表12 地方都市で生活する際に重視すること (3選択肢回答)



図表13 賃金ダウンの許容範囲



図表9 来訪した理由

来訪した理由	割合 (%)
① どうしても故郷に帰らなくてはならないから	31.9
② 地方都市で暮らしてみたいから	23.7
③ 地方都市で仕事をしてみたいから	21.8
④ 家族の者が地方都市の生活を望んでいるから	11.9
⑤ 地方都市での生活に関心があるから	2.5
⑥ 就職難で東京では仕事が見つからないから	2.3
⑦ 家族の者が地方都市の仕事を探しているから	1.1
⑧ 転勤に伴い地方都市の情報を知りたいから	0.6
⑨ その他	3.1
⑩ 不明	1.1

(単位: %)

消極的UJIターン  
①⑥ 34.2%

積極的UJIターン  
②③⑤ 48.0%

依存的UJIターン  
④⑦⑧ 13.5%

#### 4. 各道府県のU J Iターンへの取組

40道府県のU J Iターンに対する取組の状況について調査を行った。

- (1) 国の機関との情報交換及び事業連携の状況についてみると、「行っている」が21県と最も多く、以下「行っていない」が15県、「行っていないが、行う計画がある」が2県となっている。

他の道府県U J Iターン相談窓口との情報交換及び事業連携の状況についてみると、「行っていない」が29県と最も多く、以下「行っている」が9県、「行っていないが、行う計画がある」が4県となっている。道府県内の市町村との情報交換及び事業連携の状況についてみると、「行っていない」が17県と最も多く、以下「行っている」が15県、「行っていないが、行う計画がある」が6県となっている。

- (2) 「独自の制度の策定及び事業を行っている」が17県となっている。その内容は、U J Iターン希望者に対するアドバイザーの設置、U J Iターン者に対する住宅資金の融資などとなっている。

「独自の組織、機関、団体等の設置を行っている」が12県となっている。その内容は、若者の県内定住を促進するための財団、U J Iターンを支援する連絡協議会などとなっている。

- (3) 「U J Iターン者の創業を対象とした融資制度を導入している」のが6県となっている。

「地域活性化の専門知識を有する人材を育成している」が4県となっている。その内容は、地域振興に関するシンクタンクの設定などとなっている。

「地域のコミュニティ活動、公開講座等においてU J Iターン者を活用している」が3県となっている。その内容は、県のU J IターンフェアにおけるU J Iターン者による体験談の発表などとなっている。

「女性を対象とするU J Iターンの施策・制度を講じている」が1県となっている。その内容は、県出身者のいる女子大学に対する広報誌の送付となっている。

なお、「U J Iターン者のネットワークづくりを行っている」県はない。

#### 5. U J Iターン者の実態

秋田県鹿角市、長野県及び山口県のU J Iター

ン者16人（Uターン者9人、Iターン者7人）に対してインタビューを行った。

- (1) Uターンのきっかけは、「実家の家族（親）の面倒をみる」などの家族の事情と、「東京での仕事、暮らしが嫌になった」、「30歳までにはUターンするつもりでいた」などのライフスタイルの変化となっている。

Iターンのきっかけは、「大都市での現在の仕事に不安を感じた」が多くなっており、Iターン先の決定については、「かつて生活したことがある」、「一度訪れて気に入った」など、Iターンする前からその地域に対するイメージをもっているケースが多い。

- (2) U J Iターンの際に苦労したことは、「仕事があるか」ということが最も多く、Uターンの場合は、家族、親戚、友人などの出身地からの口コミが重要な情報源となっている。Iターンの場合は、東京のU J Iターン相談窓口、県のUターン相談コーナー、県の合同企業説明会が重要な情報源となっている。

- (3) U J Iターン後の生活で良くなったことについては、「時間にゆとりができた」、「家族と暮らせる安心感が得られた」、「趣味活動が手軽にできるようになった」、「自分のやりたいことが実現できた」、「自分の家が手頃な価格で持てた」という点をあげている。

悪くなったことについては、「レジャー施設や文化施設がない」、「大型の商業施設がない」、「最新の情報や流行が入りにくい」など都会的機能の欠如をあげる者が最も多い。次いで「給料が下がった」が多いが、「初めから覚悟していた」という者も多い。

トータルで見ると、「U J Iターンして良かった」という意見が全員に共通している。

- (4) U J Iターン者の地方公共団体への要望については、「大都市圏においても地元の生活関連情報を提供してほしい」、「施策や事業をわかりやすくPRしてほしい」、「人をひきつける町づくりを行ってほしい」、「U J Iターンした者同志のネットワークをつくってほしい」、「U J Iターンした人の能力や活力を地域の活性化に生かしてほしい」となっている。



## 国土庁募集

# 「わたしのUターン・Iターン体験記」および 「UターンやIターンを進めるためのわたしの提案」 優秀賞(国土庁長官賞)受賞作品

「当該作品は、大都市住民の地方回帰を促進する観点から、ほくとう総研が国土庁の委託を受け、昨年9月中旬から10月にかけて全国的に募集した表題の応募作品201編の中から、優秀賞を受賞した4編を、国土庁の許可を得て掲載したものです。」

## 『「人の魅力」が 支えるIターン』

河原 俊雄 (46才)

山形県東置賜郡高島町  
兼業農家・農業高校教師

### 《Iターンの季節が始まった。》

「突然こんな手紙を出してすみません。よくよく考え、やっとここまでたどり着きました。僕たちは高島に移住します。もちろん、夫婦の合意のもとです。……」

稲刈が終わった10月半ば、我が家のファックスにこんな文章が打ち出されてきた。発信者はIさん。都会生まれの都会育ち。2年前から高島（山形県高島町）に通い詰め、農作業の手伝いから始まり、昨年は仲間と共に畑を持ち、今年はどうとう田圃を作り通してしまった若者である。その彼がどうとう田舎暮らし、農家暮らしを決意したという。

そのわずか数日前には、東京から稲こきの援農にきていた独身女性のKさんが、やはり高島移住を宣言し、この11月には何が何でも越して来るといふ入れ込みようなのである。

今年もまた、Iターンの季節が始まった。

この3年間で都会から高島への移住者は16人を数える。そのほとんどが農のある暮らしを求めてやってきた。春の農作業に間に合うようにと、秋が家探しのピークとなる。小さな町の一つの集落に、これほど多くの人たちが殺到するというのは、恐らく日本全体から見ても極めてまれなことではないかと思う。

### 《まほろばの里農学校》

田舎暮らし志願者の目を高島に向けたことについては、今年で第3回の開催となった都市生活者のための農学校『まほろばの里農学校』の存在が大きな力となっている。真夏の1週間、農作業に汗を流し、農民の言葉を聞き、夜ともなれば、星空のもと蛍の明かりを愛でながら酒を酌み交わす、そんな異体験の中で、おぼろげな移住への願望がくっきりと輪郭をあらわにしてくるものだ。第1回目の参加者からは2家族、第2回目は先のIさんを含めやはり2家族、そしてKさんはこの夏、第3回目の参加者だ。

『まほろばの里農学校』は決して高島への移住を進めるための催しではない。地域の中堅農民、役場職員らで作る学習集団『たかはた共生塾』が、農業の価値、農業の豊かさを広く都会の人たちに知ってもらおうと企画、運営している農業体験の場だ。こんな農業体験学習ならどこでもやっている。なのに、高島のこの吸引力は一体どうしたこ



とだろうか。

1週間の滞在ですっかり高島の魅力に取り付かれた農学校参加者たちは、胸一杯に膨らんだ熱い思いを《高島病》と呼んでいる。その一番の感染源は、実は、『人』だと言う。高島の人達の魅力だと言う。20年という長い年月、有機農業にひたすらかけてきた農民たちの信念に満ちた姿勢なのだという。環境破壊が地球的規模で進む今、有機農業こそが時代を切り開いていくのだという確信に生きる逞しい姿と、農のある暮らしの豊かさを目の当たりにして、それまでの価値観が大きくひっくりかえるのを感じるということなのだろう。

### 《多彩な暮らしを紡ぎ出す》

高島はのどかな住み心地の良さを、『まほろばの里』というフレーズに託している。そこで私は、新しく高島の住人となった人々を、私も含め、《新まほろば人》と呼んでいる。《新まほろば人》の暮らしぶりは実に多彩でユニークだ。時間が自由になるからと保険の勧誘の仕事しながら米作りの専業をめざす者もいる。役場職員に採用され10aの田を耕しながら町の文化行政の中核を担う若い独身女性もいる。コンピュータのソフト開発や、映画のプロデューサーといった都会での仕事を継続しながら、田畑を作り、農家暮らしを楽しんでいるYさんやAさんの例もある。私の場合は高校教師との掛け持ちで1ha近い畑と30aの水田を耕作し、まずは兼業農家の鏡と言える(かな?)かもしれない。この秋から《新まほろば人》となるIさん、Kさんは果たしてどんな暮らしを、どんなライフスタイルを生み出すのだろうか。そして、彼らの暮らしぶりは、地域にどんな模様の波紋を広げていくことになるのだろうか。

### 《田舎暮らしに自信を》

さて、こんなIターンの先進地とも言うべき高島の事例から、Iターンを進めるためのポイントを幾つか拾い出してみたいと思う。

都会から農村への移住を実行に移そうとしたと

き、問題になるのは、仕事はあるか、家はあるか、土地は手に入るかといったところが主たるところだろう。だから、Iターンを進めようとする町や農協はまず、これらを手だてとして希望者を募ることとなる。時には定着を図るべく研修機関の生活費まで補助したりして、あの手この手の悪戦苦闘ぶりである。高島の場合町の新規就農促進対策は全くない。程度の良い空き家が数多くあるわけでもない。それでも移住者が、毎年ポンポンと思いつく飛び込んでくるのは、先に述べた通り人に魅かれてのことなのだ。このことをもう少し考えてみると、二つの側面が浮かび上がってくる。

一つはその土地で自信をもって伸び伸びと暮らしている人たちがいることへの安心感ということである。いささかの媚へつらいもない。迷いもない。緑したたる自然の中で田畑を耕し、自ら育んだ安全で美味しい米や野菜を食べる暮らしの豊かさ。そんな昔ながらの暮らしぶりを肩肘張らず日々の営みとしている人たちこそ、農を求めて都会を後にしようとする人々の先達であり、よきしるべなのだ。目指す暮らしを実践する人がその地にあるということほど心強いものはないと言える。

『なして便利で快適な町場から、こげな山ん中さ越して来んなだべ』

というような感覚のところでは、かりに移住が叶ったとしても孤立するばかりで先々行き違いも生じやすいに違いない。その地の代々の住民が、田舎の暮らし、農家暮らしに自負を持ってゆったりとおおらかに暮らしているということが何より大切な事だと思う。

もう一つは尊敬できる世話役が地域にいるということだ。しかも、その人は十分に移住者の希望も価値観も理解している。こういう人は大概地域での信望も厚いから、その人の紹介で入るとなると、ムラ社会での信用が違う。地域社会にもスムーズに溶け込めるということになる。もちろん、アフターケアも万全だ。移住の促進を願う市町村であれば、そんな世話役をしっかりと把握し、大胆に後見役をお願いしていくといった方策も取り

入れる必要があるだろう。

### 《個性を認める》

都会からの移住者の目的は、突き詰めて言えば個性的なライフスタイルの創造ということだ。耕すことを大切に考えることは共通していても、その他の点では10人10色、色とりどりの暮らしぶりである。農への比重のおき方、仕事の内容、地域とのかかわり、それぞれにその人のスタンスがある。その一つ一つの選択の中から、独自の暮らしぶりがくっきりと形作られてくる。したがって、迎える地域の側としてはこれら様々な有り様を、おおらかに包み込む包容力が要求される。少しばかり変わった人柄、暮らし方であろうとも、『なるほどそげな暮らし方もあんなだなあ』と鷹揚に受け入れられる懐の深さが大切だということだ。出る杭は打たれる式の島国根性は脱ぎ捨てて、多様性の許容という付き合い方の原理をしっかりと確立する必要があるだろう。ただし、それは都会に見られる『隣は何をする人ぞ』的な個人主義とは違う。互いに支え合う地域共同体の良さは残しつつ、個性を認めるという個人と集団との新しい関わり方の創造だ。新住民の奔放とも見える暮らしぶりや新しい男女関係を内包した家族の在り方などは、個が軽んじられ、女性が疎んじられてきた農村にさわやかな風を送り込む働きを担うことだろう。

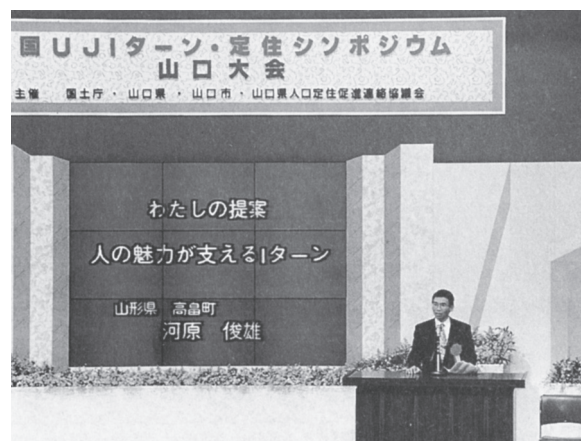
### 《都市との交流を積極的に》

高島では『まほろばの里農学校』がきっかけとしての大切な役割を担った。決して移住者を呼び集めようとする試みではなかったことが、重要なポイントではなかったかと思う。いろんな人がそれぞれの思いを抱いて集い、炎天下の農作業に汗を流し、日頃の思いを語り合った。そんな自然な交流の中から高島への夢を膨らませる人達がでてきたのである。農村への移住を目指してあちらこちら訪ね歩いている人もいるにはいるが、熱い願望を胸に秘めながら行動に移れずにいる人たちは

更に多いことだろう。そんな人たちに自分の新しい田舎を見いだす機会を与えたい。それには気軽に参加できて農村の豊かな生活ぶりを実感できる農村と都市との交流事業をどんどん行うことだと思う。いろいろな面で都市との交流を図ること、これが遠回りのようで、実は地道なIターン促進事業となるのではないだろうか。ただし、交流の真の目的は都市を鏡として、田舎のすばらしさを再認識し、さらにはその魅力を磨いていくことにあるということを忘れてはならないが。

### 《移住には信頼があればよい》

Kさんの住む家が決まった。ちっぽけなあばら家だ。しかも、仕事はこちらにきてから何か探すという。そんな思い付きのような移住が結構多い。それもこれも、この高島への信頼ということが支えているのだ。経済的保障やら、移住条件といった手厚い援助があればあったでよい。しかし、移住を決断させる最後の切札はその地の魅力、その地に住まう者の包容力にあるということだと思う。



〔平成7年1月19・20日の両日、山口市で開催された「全国UJIターン・定住シンポジウム」での優秀賞発表風景（以下同じ）。〕

---

## 『地方での起業の 可能性について』

石島 正一 (39歳)

富山県五箇所山平村  
自営業

---

Uターン、Iターンが話題になって久しいが、地方で暮らすことのネックは、職探しではなからうか。暮らし易さや住宅費の安さで地方が都会に勝ることは明らかであるが、まだまだ給与水準、仕事のやりがいといった職の分野では都会に優ることはできない。私も企業で人事業務に携わり、現在に至る経過の中で、職を変え、住まいを移し、異なる習慣の中で暮らす難しさを痛感している。

東京を中心とした企業社会は、付加価値の多い本社、営業、研究といったソフト部門を東京周辺に置き、コスト（初期投資、人件費、地方税など）の安い地方、さらに最近では海外で生産を行うというパターンに終始してきた。しかしながら、物質文明を根底におく画一的な企業社会から21世紀にむけ一人一人が生きがいをもって仕事に取り組み、生活を楽しむ精神文化の社会に移行していく過程で、道路や電気、水道、通信といったインフラの整った今日、地方で事業を起こすことがかつてほど難しいことではなくなっているのではなからうか。

Iターン、Uターンといっても、東京から地方の主要都市へ転職する場合から、過疎地で事業を始めようとする場合まで多々あるが、富山県の平村（越中五箇山）で、注文家具の制作・販売を行ってきた私たちの足跡から、田舎での起業について考えてみたい。

私たちの事業、株式会社カントリーキッズは7軒の集落、平村杉尾地区で1991年4月、石島正一、和恵夫妻と岡山出身の折口和男によって創業した。資本金1千万円でスタート、うち450万円は、過

疎の集落になんとか活気を取り戻したいという地元の人たちが出資。当初は、子どもたちの林間学校やアメリカ製の組立家具を教材とした木工教室、集落が面しているダム湖を利用したカヌーのイベントを行い、メディア（地方新聞、TV、タウン誌）を通じて地元のカントリーキッズの存在を知ってもらい、ネットワーク作りに努めた。初年度は身近な人からの注文家具を製作し、同年末、初めて富山市内で展示会を開催。2年目の7月には、工房から車で30分の私の出身地で住まいのある福野町でショップを開店。3年目の93年11月、富山市内に家具を作れるワークショップ、キッズクラブを開く。毎年、富山市と金沢市で展示会を開き、現在は東京から工房に加わった土屋裕、キッズクラブを担当する太田敦子の5人で運営。石の上にも3年とはよくいったもので、ようやく3年目の93年から、富山県内中心に注文が入るようになり、94年4月に自宅をかねクラブハウスを平村に竣工、名実ともにすぎおの住人となる。

事業を行うに当たっての一番の難点は、なんといっても販売である。地縁、血縁のない地方でいきなり、看板をあげても誰も相手にしてくれない。観光地などでも複雑な利権が絡んで、立地のいい店を借りることはかなり難しい。よしんば借りることができてもよほど周囲とうまくつき合わない地域に受け入れてもらうことはできない。何といっても、地方は商圏が小さく新しい商売を受け入れる余地は少ないのだ。

他のことについてもいえることだが、Uターン、Iターンだからといって都会での生活、サラリーマン時代の人脈、ノウハウをすべて捨てるのではなく、むしろそれを活かしてこそ地方での生活が可能だ。宣伝の方法、流通のチャンネル、都会での友人、最初はフルに活用して販路を開く方法がある。カントリーキッズの事が雑誌やテレビで紹介され、田舎で暮らしたい、木工をやりたいという方がやってくる。話を聞いてみると都会が嫌だから、人間関係に疲れた、仕事がおもしろくない、消極的な人が多い。好きなことだけして生



きて行きたい。もちろん世間はそんなに甘くない。対人的なこと仕事の選択の幅、田舎が都会に優っているとは思われない。まさにそれらの事が原因で田舎から出ていった人が沢山いたのだから。小さな社会に終日監視されているようなものだ。他人の視線につぶされない、開き直りも必要だ。収入の減少や不便さを補って余る積極的な理由がないと耐えられない。

過疎地での販売チャネルのキーはなんといっても情報発信と、ネットワーク（ファン）作り。スモールビジネスは基本的に流通イノベーターだ。コンピューターやコピーなどの事務機器が広く普及して情報発信が簡単になった。画期的な発明や、技術革新、大量の資本に支えられた都会での起業に比べ、過疎の地域でスモールビジネスを起こそうとするなら、事業の核になるものがなんであれ、扱う商品を差別化するのは、自身が求める生活、地域への想いであろう。一つ一つの家具に自分たちの住まい方を表現している。情報発信は、こんな暮らしを過ごしたい、田舎に住みたいと思う、まさにその想いを街にむけて発信する。うっすらと皆が感じている物質文明への批判、憧れはあるけれどそんなに簡単ではない田舎の暮らし、自分たちが求めている快適な暮らしを実際の生活を通して表現していく。旧知の人たちへの家庭新聞のようなものから、新聞、雑誌を通じての提言。時には、マスコミ側からの取材もあるだろう。

ちなみに、私たちは家具に対する考えや、田舎での暮らし、「生活作り」といったテーマについての新聞、「キッズニュース」を有料で年間4回発行している。もちろん最初は、知人や、工房を訪ねてくれた人、展示会の来場者などに無料で送付してきたが、データ数が二千を越えた段階で有料とさせてもらった。現在、会員は150名ほど。

同じことを何度もしゃべったり、書いているうちに、自分自身の想いの中で本当に思っていること、スタイルとして捉えていることがだんだん浄化されてくる。そして、それらの想いが商品から窺われるようになって、遠く離れたお客さまの共

感を呼ぶようになる。カタログショッピングや通信販売など非対面販売が盛んになるにしたがって、地方のデメリットは軽減されてくる。

生産は、アンチ大量生産大量消費。手作りのきめこまかさ、素材の良さ、ユーザーの想い、製作者の経験を活かし、長く使える飽きのこない家具を手ごろな価格で供給。情報発信、ネットワーク作りをきちんとおこなって、作り手の顔をみせる。誰が作って、商品がどんな経路で手元に届くのか分かりにくい今日、一見手間のかかる無駄な作業のように見えるが、これが、流通経費、管理経費を削減し、長くつき合える商売＝スモール・ビジネスの成功へとつながるものと信じている。家賃や人件費・広告宣伝費といった固定費、建物・土地といった初期投資がかかり投下資本を早期に回収する必要がある都市部では、気長な商売は難しい。

私たちのスタンスはあくまでも家具屋。

まだまだ、単年度でも利益をあげられない、事業としては不完全な状態だが、3年の月日をかけて築き上げてきた信用と商圏は数字には表れない財産だ。お客様とのつきあいを通して、最近では家具屋の自信のようなものも感じられてきた。

地方の時代といわれて久しい。物質的な豊かさを求め、産業革命以来地方から都市へと集中してきた人が、いま、精神的な豊かさを求め地方へ還流し始めている。消費者の時代から、生きることのパフォーマンスの高さを求め生活者の時代と言われている。田舎には、まだまだ生活の知恵、技術が残っている。一村一品運動や地域おこしの活動を通じて、事業の種は地方に散在している。それらの種から芽をはぐくみ、収穫できる事業にまで育てるためには、マーケティングや需要創造といった違った角度から、情熱をもって取り組む人材が求められている。まさに、都会から地方に移住しようとする人の中にそのような人材を求めることが可能である。

戦中、戦後、疎開や満州からの引き上げ者が田舎にやってきた。農業しか産業のない戦後の日本



にとって、地方こそ人口を抱えるキャパシティがあったのだ。豊かな生活を求めて、だまっけても都会から地方へと人が還流しはじめている。生産と消費を同時に行う生活者にとって消費しできない都市の生活は不完全なものになりつつある。環境や健康といった生活を考える時代には、自らのライフスタイルを築き実践する人にビジネスのチャンスもあるのではないだろうか。地方の主体性が問われてくる。いまだに高度経済成長時代の残影を引きずったビジョンしか持たない自治体が多いのは残念だ。人口増加を唱えながら町営住宅さえ建てられない町が多いのは悲しい。私たちも東京から新しい仲間を迎える際、住宅を探すのに苦労した。結局見つからず近くの納屋を改造して住んでもらった。行政には、都市から地方へ移るための基盤整備をしてもらいたい。あちこちに空いている村の建物があっても利用できないのはなぜだろう。がんじがらめの法律に縛られずに立法主旨をくんで緩やかな運用ができないものか。

地方への転職は難しい。事業を始めるのはなおさら難しい。地方をベースに地域に根付いた事業が成り立ち、就業人口を増やすことが、地方のキャパシティの広がりになる。大企業の地方工場の誘致だけでなく、夢のあるスモールビジネスを積極的に応援してもらいたい。カントリーキッズは、まだまだ発展途上だが、時代のフォローウィンドを受けて、これからも頑張っていくつもりだ。



---

## 『住めば宮古・ 離島 I ターン奮闘記』

井口 千景 (30才)

沖縄県宮古郡上野村  
上野村役場勤務

---

### 「オレ南の島に行くから」

ダンナの、毎度の口癖になっていて、もう取り合う事もしなかったこの言葉が、まさか現実のものになろうとは。

東京のド真ん中でOLと主婦、そして母の3足のワラジを履き、毎日が戦争のように過ごしてはいたけれど、一度として田舎に引っ込みたいと思ったことのない私にとって、この“Iターン”は正に晴天のへきれき。勿論手放して賛成するはずがなく、大ゲンカ。「考えてもみなさいよ、欲しい物ややりたい事がいつでも手に入る都会の生活から、誰も知り合いのいない離島の生活へなんて耐えられるワケ?!」こんな私の反撃も、「南の島=毎日がバカンス」になっている彼の耳には入らない。

だいたいダンナが決心したきっかけになったのは一冊の求人情報誌。「あなたも南の島で働きませんか」なんて書いてあるリゾートホテルの求人広告を見て、これだ！なんて後先考えずに一人で決めてしまったのである。しかし、一家の財政担当の私にとっては、出産後仕事に復帰して1年足らず、やっと今後の見通しも立ってきたというのに、それをぜーんぶ1からやり直せということだ。これが会社命令の転勤だということならまだ諦めもつくが、今の会社を辞めてまったくの新しいスタート。それも2千km離れた南の孤島で、である。しかも1歳前の子供を連れて。……目の前が真っ暗になった。

とにかく一度この目でどんな所か見てみて、それから決めても遅くはない—そう思った私は、一大決心した。“カマドの灰まで綺麗にして” 一路「宮

古島」に旅立ったのだ。

12月も末だというのに、飛行場の温度計は22度を指している。コートを慌てて脱ぎながら、一息ついて辺りを見回したが、……TVで、見る様な青い空も海も、どんよりとした雲に覆われて見えない。あたり一面に広がるのはサトウキビ畑だけ。3時間の飛行機の旅で疲れた私の目には、ここがどうしても魅力ある島には思えない、というのが第一印象だった。これからの生活がどんなものになるか、想像がついてきた。

果たして、それからの私を待っていたのは、やっぱり退屈な日々であった。“小さな島だから、もしかしたら皆すごく人なつっこくて優しいかもしれない”そんな幻想を密かに抱いていた私の考えは甘かったらしい。宮古の人達は初対面、とくに内地の人間には一様に警戒心を持つのか、いくら仲良くしたいと思ってもぶっきらぼうで、なかなか打ち解けてもらえない。毎日毎日子供と2人きり、広い公園でも話し相手も見つけれない様な日々を繰り返し、だんだん私は鬱状態になり、ダンナを恨めしく思う気持ちばかりが先に立ち、「何でこんな所に私を道連れにしたのかしら」なんて思うたびにその気持ちが大きくなっていく。その繰り返し。ダンナもこんな筈じゃなかったと愚痴を言うようになった。それ見たことかと私が言えば、凶星を突かれたダンナとの大ゲンカに発展する。

このままでは本当に「離婚の危機」に突入してしまう—そう恐れた私は、何とかしてこの状況を打開すべく発奮した！

まず、とにかく私達にも参加できるような催しやサークルに積極的に顔を出すようにした。そして子連れママさん達のサークルを見つけ、足繁く通い、何人かの友人を作ることに成功した。しかし、この集まりは内地からの転勤族の奥さんが多い為、会うとどうしても内地と宮古の比較をして嘆くことが多く、2、3年でここを離れると思うとそれ程地元の人と交わろうとも思わないらしい。彼女たちはそれでいいかもしれないが、私達はヘタしたらここにお墓を建てることになるかもしれ

ないのだから、やはり地元の人とも仲良くしたい。何か別の道が無いものだろうか。

宮古島には、他の沖縄各地にはない面白い風習が数多くあり、中でも「オトーリ」というお酒の回し飲みは、日常生活のなかで行なわれている習慣だという事を、ここに来て初めて知ったのだが、1つのグラスでその場に車座になった人全てに泡盛が回され、皆が一気に飲み干す様を見て、最初は正直言って『カンベンしてー』という感じだったが、幸いというか不幸にしてというか、私達2人とも大酒飲みである。宮古の人は何がなくともオトーリといったところがあり、普段ぶっきらぼうな人でもお酒が入るとテキメンに陽気になり、初対面の私たちにも親しげに話をしてくれる。そしてその後も“オトーリを回した仲”として、友人になれるのだ。これを利用しない手はない。

かくて私達は、宿酔いになろうとも、誘われさえすればいそいそと出掛けていった。そして回を重ねるにつれ、本当に私達はオトーリに助けられたと思うようになってきた。

宮古の人たちは確かに取っつきにくいのが、逆に一度取っついてしまえばその後はとても良くしてくれる。離島の為、輸送費がかかるせいか物価はむしろ東京より高く、特に野菜類はビックリする様な値段で、我が家は冷凍野菜に頼らざるを得なかったのだが、親しくなった人からわざわざ大きな南瓜や菜っ葉を頂いたりするようになった。またある日は、子供と散歩をしていたら家に招き入れられ、両手に余るほどのお菓子を持たされて母子共に狂喜したこともある。

「東京からきたイグチさんだってー。ミヤークが好きで移住してきたんだってさー」私達がいつもオトーリの前口上の時、宮古に対するお世辞混じりで言う挨拶の言葉をよく覚えていて、“こいつらは観光客気分ではんの腰掛け程度に宮古にいるんじゃないくて、永住するつもりらしい”という眼で見られるようになると、私達もすんなりと仲間に入れて貰えるようになった。

私の現在の仕事が決まったのも、何を隠そうオトーリの席である。それまで私は職安に足を運ぶ

こと10数回、7回も面接に行ったのに全ての返事はNO。小さい子供がいるから何かあったときに困るというのがその理由だった。なるほど確かに地元の働く主婦たちには大体おじいちゃん・おばあちゃんや親戚が大勢ついていて、例えば子供が病気になるっても、安心して働けるだろう。でも私は東京でずっと仕事を続けてきたのに……それをオトリーの時に嘆いていたら、その場に居合わせた人が、それなら今ちょうど1人辞めてしまって困っているからと、トントン拍子に話が決まってしまったのだ。

それから私たちは、それまで住んでいた平良市内のマンションを引き払い、上野村の村営住宅に引っ越した。実質上もっとド田舎に移ったことになるのだが、海が目の前に広がりとても気持ちがいい。地元の人たちともっと近い距離になったおかげで、市内にいたときより更に親しく声を掛けてもらえるようになった。

かくして、わたしが失意のどん底のような気持ちで宮古の土を踏んでから10ヵ月経ったのだが、今ではダンナも呆れる程、私はここでの生活を楽んでいる、そう、自分でも驚く程に。

今夜も泡盛の心地好い酔いに身を任せながら、“でもオトリーはあくまでもきっかけに過ぎなかったんだよね”と顧みる。

どこの土地に行っても勿論そうだと思うのだが、いくら自分がよそから来たといっても「その土地の人に受け入れてもらう」のではなく、「受け入れられる様自分から動く」という事が大事なのではないだろうか。一見Iターン希望者にとって当然のように思われるが、殊ここ沖縄に憧れて住みたいと思いやってくる人達の中には、観光客として見ていた宮古と、住人として見る宮古とのギャップに戸惑い、それでも自分の理想を追い求めているが故に、地元との交流が平行線をたどってしまう人が多いように感じる。

とにかく私は、殆どプライベートのない無遠慮さや、宿酔に時折辟易しながらも、全て楽しい経験と考える様にしている。マイナス思考をプラスに転換する、言うは易く行なうは難し。それでも



近頃、やっと360度の視界に広がる真っ青な空や、七色に輝く美しい海の色をようやくゆっくりと堪能する心のゆとりができた。

—住めば宮古、とはよく言ったもんだ。

---

## 『星に魅せられて』

篠永 浩二 (42歳)

広島県蒲刈町  
天体観測館 館長

---

広島県の瀬戸内海に浮かぶ自然豊かなみかんの島上蒲刈島。人口3,300人のこの島に蒲刈島天体観測館館長として家族とともに移り住んで3年余が過ぎた。

私が天文に興味、関心を持ち始めたのは、小学生4、5年生の頃で理科の授業で学習したことがきっかけであった。中学・高校と天体観測・写真撮影を中心に活動し、大学では特に天体望遠の構造と自作にも興味を持つようになっていた。卒業後、北九州で中学校の教諭に就いてからは、天文部を開いたり、地域では、天文協会の世話役、児童文化会館（プラネタリウム）での講師や観望会の協力等の活動をしていた。しかし、北九州市では、工場地帯特有の公害問題など天文観測には条件が悪く「もっとより良く月面、惑星、星雲等を観測してみたい」そして「空や自然環境の良い場所で思う存分天文活動に集中して取り組んでみた



い」という願望があった。

ある日、小学生の頃から愛読している天文雑誌で蒲刈町天体観測館館長の募集の広告が目止まった。広告の文字が心に飛び込んできて、その願望が頭の中に明確なものとして意識づけられた。この時の興奮は、長い間忘れていた感覚であった。蒲刈町天体観測館は、平成元年に開催された「89海と島の博覧会・ひろしま」県民の浜会場の施設として町が建設した。

しかし、博覧会終了後は、管理、運営する専門のスタッフが不在となり開店休業状態となっていたということであった。館長に応募することは、当然、迷いや戸惑いもあった。もし、応募して採用されれば、個人ではとても持てない望遠鏡を操り、多くの人に星の素晴らしさを伝えることができると同時に、それは、慣れ親しんだ教諭の職から離れて見知らぬ土地に飛び込み、溶け込まなければならない。「とりあえず履歴書を送って夢を見せてもらおうか。」という気持ちでの応募であった。

書類選考を通過し、筆記と面接の試験を受けるため、初めて島に訪れた時、きれいな海と空気に囲まれた美しい自然と夜の満天の空に広がる星の輝きを時下に接して、夢を見るだけで終わりたいという気持ちが込み上げてきた。その気持ちが伝わったのかどうか、内定を伝える電話がかかってきた。しかし、実際、館長に決まった時は、やはり、家族のこと、収入のこと、今後の見知らぬ島での生活のこと……等、どうしようと悩んでいた。

悶々とした日々が続いたが、妻の「好きな道を選ぶ人生もあっていいんじゃない、協力するからやってみれば」といいう言葉で踏ん切りがついたのであった。そして、教諭を退職し、平成3年4月蒲刈町の職員、館長として赴任してきた。就任当初は、連日のようにテレビや新聞の取材、講演の依頼が続き、ようやく落ち着いたのは、半年ぐらい過ぎてからであった。町の人たちは、人情豊かである。移住後すぐに気軽にあいさつをかわすようになった。島の生活で一番驚いたのは、家に



カギをかけなくても安心であること。そのとおりにしたらいつの間にか、イモ、キャベツなど野菜やミカンなど玄関にどっさり置いてあったことも度々であった。町の人たちの温かい対応に、すんなり島での生活に溶け込んでいった。

館長としての主な仕事は、昼間は来館者用の資料作りや望遠鏡の調整を、夜は来館者にその時々で見ごろの星を見せ、それに関する説明をすることである。町民及び観光客を対象とした天文講座、観望会、天体教室を開催したり、「広報かまがり」で「星空ウォッチング」と題して毎月の天体現像の見所について分かりやすく解説するなど、星を通してふれあいの輪を広げ、特に子供たちに夢を与え、天文分野での先見的役割を期待している。

館長といっても、専属は一人で海と島の工作展示館も担当し、技術科教諭の経験を生かし館内での工作の指導も行なっている。

また、地域では、「遊星500」という天文同好会を結成し、地域での活動を行なっている。その集大成として、地域の各種団体の協力を得て2～3日間に渡るイベント「星まつり」を開催している。星まつりでは、スターウォッチングをはじめ天文ウルトラクイズ、星の映画館、星と音楽の夕べ、人形劇、星空寄席、講演会、全員ジャンケン大会などさまざまな催しを企画し、町内外合わせ延べ3,000人ものが参加が得られている。

今後は、天文に関する情報の発信地、中心地として、関連施設の整備及びイベントの拡充、充実を図りながら、地域づくり等活性化につなげて行きたいと考えている。



## 泡立つビール販売前線

日本経済研究センター首席研究員 武藤博道

3月初め日本橋高島屋の和洋酒コーナーでジョニウォーカーの黒ラベルが2980円で売られていたが、気付いた人は少いのではなかろうか。なぜなら、輸入ウイスキーの陳列棚自体が目立たない上に最下段にひっそりと置かれていたからである。だが、値段は普通の小売店よりも安く、場所柄を考えると酒のディスカウンターにも対抗できそうな気がする。そこで「酒の安売り王」として知られる河内屋葛西店をのぞいてみると、こちらはジョニ黒2510円とさすがに安く、輸入ウイスキーが店の片側壁面に床から天井に届きそうなくらいびっしりと並べられていた。ディスカウンター対百貨店、そこには輸入ウイスキーをめぐる価格破壊の勝者と敗者の対照が感じられた。

しかし、高島屋でも輸入された酒のすべてが片隅に置かれているわけではない。例えばワインは、高級品が広いセラーにいっぱい詰められ、1000円を切る普及品が床に並べられている。一種のすみ分けができていようだ。もう1つはビールで、目立つ場所にモルソン・アイスビールが1缶125円で売られている。ディスカウンターやスーパーよりはやや高いが、一般酒販店の国産350ml缶225円と比べればはるかに安い。ビールの価格に一体何が起きているのだろうか。

## ▶リベートが生んだビールの価格破壊

河内屋が酒の安売りを始めたのは東京オリンピックの年にさかのぼる。しかし、一般に知られるようになったのは、並行輸入をテコに輸入ウイスキーの大幅安売りをするようになった1990年以降である。そして、化粧品価格の値下げで資生堂とぶつかった93年頃にビールの値下げを実行、卸問屋との問題を引き起こした。河内屋が設定した価格は大ビン1ケース（20本入り）が5190円。当時の定価は6600円（ケース代込み）で、小売店の粗利は1300円弱と見られていたから、小売店の中には問屋よりも河内屋から仕入れられるところも出たと

いわれる。こうした値下げができたのは、輸送コストを極力減らした経営努力もさることながら、少なくとも1ケース当り110円以上のリベートを得るだけの量販規模を河内屋が達成していたからにほかならない。リベートはメーカーが量産によるコストダウンを享受するために採られてきた手段だが、皮肉にも末端価格が崩れる原因にもなったのである。

同様の動きは、「やまや」および「マイマート」など他の酒類ディスカウンターにも及ぶ。しかし、この段階ではメーカーから小売りにいたる価格体系そのものが見直されるというほどではなかった。

## ▶乱売に火を付けた大手スーパー

1994年5月1日、酒税が引上げられた。それに従えばビールの価格は1缶（350ml）当たり220円から225円に上がるようになっていた。しかし、その直前に発表されたダイエーによる値下げ宣言はその後の乱売合戦の幕開けとなった。販売価格はそれまでの219円が4月14日から203円（いずれも消費税込み）に引き下げられ、ジャスコも16日から追随した。合併で販売額が増え、物流コストが下がったというのが理由である。日経流通新聞によると国産ビール（350ml缶1ケース）のメーカー出荷価格は3792円、卸価格は4206円程度といわれており、1缶203円だと（リベートを除く）粗マージンは16%弱にすぎない。販売量が少くリベートも多くない一般小売店にとって、大手スーパーなみの価格で売ることは不可能に近い。

大手スーパーの値下げの影響はやや遅れて酒類ディスカウンターに及んだ。河内屋は酒税が引上げられた5月以降国産350ml缶1ケースを4170円で販売していたが、大手スーパーに比べ1缶当り30円程度安かった。しかし、10月下旬になると1ケース当たりの価格を3970円に引き下げ、価格競争をエスカレートさせた。国税庁の免許要件が世帯数基準から人口基準に変わったほか、特例免許

地区が設けられたために、新規免許枠が拡大し、競争が激しくなったからだといわれる。こうした価格競争のあおりを受けて一般酒販店のなかには、免許を売り渡したり、大手ディスカウンターのフランチャイズ店に加盟したりするケースが増えつつある。

しかし、94年以降の価格競争は、単にスーパー、ディスカウンター、一般酒販店など小売業相互の戦いという次元を越え、メーカーから小売りに至る価格体系全体の変更を迫っているように思われる。そこには流通業の価格支配力の高まりとメーカーの苦闘の二つの動きが交錯しているといえる。

### ▶急増した輸入ビール

流通業の価格支配力の向上を示す一つの現象は「ローコスト・ソーシング」（低コストの仕入れ先の発掘または仕入れシステムの構築）への動きで、その一つの手段が海外メーカーからの直輸入である。図は1990年以降におけるビールの輸入量と単価を示すが、94年の輸入量は前年の3倍近い。しかも、単価は93年のリットル当り128円から94年には94円に低下しており、それだけ安いビールの輸入へのシフトが起きたことをうかがわせる。事実、海外からの安いビールを調達する動きは大手スーパーだけでなく百貨店にもみられ、例えば全日本デパートメントストアーズ開発機構（ADO、百貨店34社の共同仕入れ組織）は米国のミネソタ・ブリューイング社との直輸入契約をむすび、1缶150円前後の販売価格を可能にしている。冒頭の高

島屋の125円ビールもこうしたルートで調達したもののと思われ、ダイエーのバーゲンブロー（330ml）100円や河内屋のラバット・アイスビール（355ml）99円も直輸入によるものである。

こうした直輸入ビールの増加は国別輸入シェアの変化にも如実に現れており、オランダ、ベルギー、カナダがシェアを伸ばした半面、イギリス、アメリカ、メキシコのシェアが後退している。そして、シェアを増やした国ほど単価が低いか、前年からの値下がり大きいか、いずれかの傾向がある（表参照）。

表 ビールの上位10カ国の国別輸入シェアと単価

国名	シェア (%)			単価 (円/リットル)	
	1990	1993	1994	1993	1994
イギリス	1.8	1.5	0.9	225	202
オランダ	4.6	4.8	5.2	149	108
ベルギー	0.2	0.7	7.8	278	78
フランス	1.3	0.4	0.5	130	110
ドイツ	2.5	1.6	1.8	159	123
カナダ	1.5	2.4	7.9	88	78
アメリカ	74.0	74.5	65.7	126	95
メキシコ	4.9	3.3	1.2	145	144
オーストラリア	4.1	5.6	5.4	83	75
ニュージーランド	0.2	0.4	1.1	112	75

資料：「日本貿易月表」  
注：1994年は1～11月の合計。

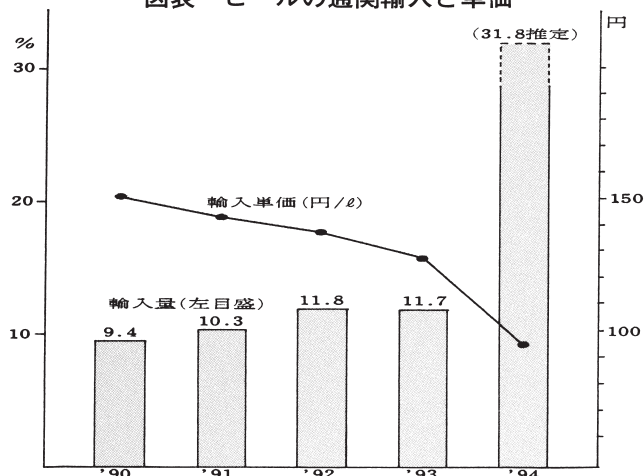
また、もう一つの手段として「製販同盟」（特定小売業向けに大手メーカーが供給するもの）の動きがある。アサヒビールとセブンイレブンによる低価格輸入ビールの共同開発などがその例だが、価格面に影響が出るのはこれからである。

### ▶突かれた税法の盲点

他方、メーカー側の努力を反映するのが「発泡酒」である。サントリーは94年10月に「ホップス」を1缶180円で売り出した。日本の酒税法では、麦芽の比率が3分の2以上をビール、それ以外を発泡酒としており、1缶当りの税額がビール=78.81円、発泡酒=54.21円と25円近く違う。残りの20円は企業努力によるが、発泡酒の麦芽比率は60～65%程度で味もほとんど変わらないことから、税法のすき間を突いた商品開発だといえる。

こうした一連の動きをみると、長く規制価格のように思われてきたビールもオープン価格になる日が遠くない気がする。

図表 ビールの通関輸入と単価



資料：「日本貿易月表」  
注：'94年は'93年の実績に1～11月の前年同期比をかけたもの。

# ほくとう日本のひとびと(7)

ほくとう総研 理事長 窪田 弘

## 札幌農学校の人々

北海道の開発は、アメリカ西部開拓の延長であったと言えば、突飛に聞こえるかも知れない。明治政府は、明治2年北海道に開拓史を設けたが、それにアメリカの援助を求めることになった。開拓次官黒田清隆は、自ら渡米し、グラント大統領に顧問の派遣を要請した。グラント大統領は、農務長官ケプロンを推薦した。ケプロンは明治4年(1871)、化学技師アンチセル、機械土木技師ワーフィールドらを伴って日本に到着した。ケプロンの計画によって北海道の開拓に従事した専門家は合わせて75名に上ったといわれる。このなかで札幌農学校の創始者クラーク、鉄道を建設したクローフォード、鉱山資源を開発したベンジャミン＝ライマン、牧畜の恩人エドウィン＝ダンなど、忘れてはならない人がある。

「世界の歴史(中央公論社)付録11」に興味深い対談が出ている。

「池島信平 北海道史はアメリカ史の延長だね。北海道の古いことを、アメリカ史の延長として類似点をとらえて、いろいろ細かいことをやったらおもしろいと思うね。クラーク博士だってそうだし、要するにフロンティア・スピリットだものね。尾鍋(輝彦) アメリカでフロンティアがなくなったところに、海を渡ってフロンティアを探したのだね。

中屋(健一) いや、そうじゃない。もっと前だ。明治4年だもの。北海道でいちばん先にできた鉄道は1881年、明治13年だね。本州の鉄道はイギリスから来た。ところが北海道の鉄道は、あの「弁慶」はアメリカから来たのだよ。手宮と幌内のあいだにできた。いま北海道へ行ってみると、複線のところは、手宮と幌内間だけだ。あとの日本人のつくったところは、日本人はケチだから、みな単線だよ。」

さて、ケプロンは、調査の結果いろいろな提言

を行ったが、その中の重要な構想として、札幌に農学校を設けることがあった。この提言を受け、まず、東京に開拓使仮学校が設けられるなどの経緯があり、次いで札幌農学校が設けられた。予め教頭に予定されていたクラーク博士が、1876年6月東京に到着後直ちに口頭試問によって東京英語学校(後の東京帝国大学)在学中の生徒から官費生11名を選んだ。

選抜された11名は、クラーク博士一行や黒田長官とともに、644トンの開拓使御用船玄武丸で札幌に向かったが、途中過密な船室内の待遇に不平不満が起ころいはじめた。ある日の昼頃、何人かの生徒が甲板上で卑わいな俗歌を大声で歌ったことが発端となって、一騒動もちあがることになった。折悪しく、彼らのいた場所は、ちょうど黒田長官が食事をしていたホールの真上だった。生徒たちに大いに期待していただけに、驚きのあまり黒田長官の怒りが爆発した。

「こんな生徒ではとうてい成業の見込みはないから、函館から追い返してしまえ。」とまで極言するほどだった。随行のものがとりなし、航海中の謹慎を命じてその場はひとまず収まったが、黒田は心安らかでなく、生徒たちの前途に大きな不安の影を感じとった。黒田は、クラークに人物養成に関して意見を求め、「最高の道徳を生徒たちに仕込んでいただきたい」といった。

「それでは、精神教育の糧として、聖書を読ませましょう。」

しかし、キリスト教の布教が解禁(といっても実態は黙認にすぎなかった)されたのはわずか3年前であり、北海道ではいまだ邪教とされ、開拓使当局は忌み嫌っていたのである。

黒田「いや、キリスト教はわが国典の厳禁するところであるから、聖書の類はいっさい用いてはなりません。

クラーク「聖書によらなくては徳育は思いもよりません。聖書にまさる心の糧はないと思います。」





クラーク博士

〔出典：「W.S.クラーク—その栄光と挫折」  
北大図書刊行会発行より〕

後クラークの一举一動に深い注意を払い、日一日とクラークの人格、教育上の識見、技量、そして生徒たちへのすぐれた感化力を認めざるを得なかった。

四ヶ月後、黒田長官は、生徒たちが農場で一生懸命に実習に励んでいる姿を望見して、“よきかな”と思った。そしてようやく聖書の使用を黙許した。「貴下は必ず私の希望どおり、国家に有用な人材をつくってくれることと信じます。徳育のことは貴下の自由にやってください。修身書として聖書を用いることはさしつかえないでしょう。しかし大っぴらにやってもらっては困る。」

このことは、キリスト教が北海道の開拓という新しい国づくりに、人間づくりに、新しい精神的背骨と原理を注入したことになり、日本の近代化に、深いそして強烈な影響を与える結果になったと思われる。

また、クラークは、生徒の農業実習に当たっては、一定の労賃を支給して独立勤労の気風を養うと同時に近代的な経済思想を植えつけようと努力した。当時のわが国の学徒は、多くは大臣、参議のような政府の高位高官を夢み、空理空論いたずらに天下国家を論じ、悲憤慷慨する、いわゆる政治、法律書生たらんとする風潮に墮しがちだった。クラークの教育は、真に近代人として生きるべき態度を、しかも実地に教えようとしたのであった。開校にあたって、当局者の第一の課題は早急に学則を定めることだった。意見を求められたクラークは、はっきりと次のように、力強く言った。「こんな細則を設けてする教育では、真の人間教育ができないのではないか。“紳士たれ” Be Gentle-

聖書が悪ければ、その徳育の問題にふれないでおきましょう」と拒否。この対立はその時は解けなかったが、黒田は、その

後クラーク

manそれで沢山ではないか。」このようなクラークの感化を受けた生徒たちが、新たに入校してくる生徒たちに精神的感化を及ぼし、一つの独自の学風が成長し、発展していったと言われる。

最近、色々な所にアメリカの大学の分校などが誘致されている。私も見学する機会があるが、概ね宗教はタブーであり、知育のみを施している。それはそれで意味がないわけではないが、私は、札幌農学校の故事を思い起こし、何か日本にない精神的なバックボーンが欲しいように思われるのである。

さて、クラーク博士といえば、ボーイズ・ビー・アンビシャスが有名である。1877年、クラークの契約期限が到来し、4月16日いよいよ帰国の途につくことになった。生徒25名が創世橋ぎわの開拓使本陣前で記念撮影をした上、馬を連れて見送った。残雪が残り、寒い風が吹きつけていた。札幌の南24キロの島松にまで来て、駅通中山久蔵の家の前の広場で休息しながら、過ぎた日々の楽しい思い出を語り合い、尽きぬ名残を惜しんだ。時が迫り、いよいよ別れの時が来た。クラークは一人一人と握手を交わし、「諸君、ときおり消息を知らせることをいつまでも忘れないでくれたまえ」と繰り返し、馬上の人となった。クラークは生徒一同を振り返り、「諸君、元気であってほしい。「Boys, be ambitious」と力強く叫んで馬に鞭を当て、また数回振り返って坂道を上っていった。坂道の前方の雑木林の彼方にクラークの影は消えた。

最近では、千歳から札幌まで高速道路が通じ、島松にあるクラーク記念碑の前を通ることがなくなっていささか淋しい思いをしている。北大校内のクラーク先生の碑で往時を偲ぶのみである。しかし、「Boys, be ambitious」は、その後今日までも、青春のスローガンとして燃え続けている。今でも、多くの若者たちが、この言葉を、他人がやっていないことに挑戦せよという意味に理解し、この言葉から励ましと力を得て、思い思いに色々なことに挑戦している。良き教育の持つ精神的感化の大きさに感銘を受けるのである。(以上主として蝦賢造「札幌農学校」新評論91年刊による)

〔以下次号〕



# ヤーさんの思いで

豊平製鋼株式会社  
相談役(前社長) 齋藤 達



昭和22年頃のことである。我が家にしばしばヤーさんの話題が登場した。当時道庁の拓殖計画課にいた父がヤーさんの世話係りになったからである。ヤーさんこと佐藤彌さん。本道初民選知事田中敏文氏の最初の副知事であった人である。ヤーさんには道庁の係長あがりの田中知事の補佐役は居心地が悪かったらしく、2年ほどで辞めて参議院議員の選挙に出た。当選すれば大臣になるという話もあって父も懸命に運動していたがあえなく落選した。

私が就職出来たのはヤーさんのお陰である。最初の就職試験に失敗して国分寺のヤーさんのお宅に相談に伺うとヤーさんは「そうか。じゃ西山のところに頼んでみようか。」と言ってくれた。西山弥太郎氏、初代の川崎製鉄の社長である。千葉の埋立地に、関西メーカー初の溶鉱炉を建てようとした西山社長の計画は、戦後の日本鉄鋼業近代化の先駆けであったことは良く知られている。しかしこの無謀とも思われる計画に反対したのは、当時「法王」と呼ばれた一万田日銀総裁であった。西山社長は親交のあったヤーさんに局面打開を懇請、ヤーさんは友人の池田勇人氏（元蔵相、首相）を動かして一万田法王の反対を撤回させたという。このため西山社長は終生ヤーさんに恩義を感じていたということだ。

私が川鉄の千葉製鉄所に勤務してから、年に3回くらい国分寺の駅に近い木造の古いお宅にお邪魔した。ヤーさんは自分で御飯を炊いてくれて、肉や魚などを奥さんに注文させた。ヤーさんは酔えば天下、国家の話、政界や財界にいるのは馬鹿か小物ばかり、川鉄も西山以外はろくな奴はおらんと快刀乱麻。勿論社会に出たばかりの私にはヤーさんの言っていたことが嘘か本当かわかるはずがない。

ヤーさんは全くスケールの大きい人であった。

5高同窓で朝日新聞の記者仲間であった細川隆元氏は、「小説朝日新聞」や「はだか交遊録」でヤーさんのことを万感の思いを込めて書いている。ヤーさんは大変な酒豪で天衣無縫、胆力、智力、体力は人並み外れ、正義と思ったことを通すためには権力をも決して恐れなかった。大阪の記者時代、西の横綱として、浜松で東の横綱と飲みくらべをし、三日三晩で6升を飲んでも勝負かつかなかったと細川隆元氏は書いている。ヤーさんは池田勇人氏や佐藤栄作氏（元首相）とも親友で特に佐藤栄作氏とは5高時代同じ下宿で3年間暮らしていた。佐藤栄作氏を、癌で辞任した池田勇人氏の後継者（首相）につないだ本当の演出家はヤーさんであったそうである。

ヤーさんは北海道開発公庫（後に北海道東北開発公庫）の発足した昭和31年6月から10年余の間、同公庫の監事をしていた。ヤーさんは公庫に自分の机なんかいらんと言っていたが、ヤーさんが公庫のためにしたことは机の上でするような小さなことではなかったに違いない。

飲代に窮して廊下で社長に無心した貧乏記者が、公庫というお金を貸すところにいるのだから世の中はわからないものだと言っている。ヤーさんは新聞社を退社したのち中国で働いた。その退職金の一部で国分寺に2000坪の土地を買っていた。昭和40年頃そこに立派な邸宅を建てた。その頃はもっぱら政界のご意見番だから夕方家を出て行く。眼光炯々としたヤーさんの風貌から近所の人は泥棒の親分かと噂していた。佐藤彌さんが亡くなったのは昭和46年3月23日、私は任地のドイツで訃報をきいた。亡骸を擁して泣いた佐藤首相夫妻をはじめ、全閣僚が佐藤邸に集まったので近所の人をはじめヤーさんが偉い人だったとわかったと言う。

## 業務目誌

# ほくとう DIARY

(平成7年1月～平成7年3月)

ほくとう総研のおもな出来事、活動内容についてご紹介します。

- 平成7年1月19日 地域おこし研究会開催（東北 福島県会津若松地区）  
研究内容：地域おこしにおける第3セクターの役割  
市街地再開発事業のすすめ方等
- 1月26日～27日 地域おこし研究会開催（北海道 胆振、日高、静内地区）  
研究内容：民間企業の現場の体験、事業家審査の事例、  
イベントによる地域おこしのすすめ等
- 2月14日 講師派遣（地域交流センター、秋田県、岩手県）
- 2月20日 講師派遣（須賀川商工会議所）
- 3月20日 第7回理事会・評議員会開催
- 3月30日 NETT10号発行

### 事務局から

#### ▲本誌へのご意見、ご要望、ご寄稿をお待ちしております▼

本誌に関するお問い合わせ、ご意見、ご要望がございましたら、下記までお気軽にお問い合わせ下さい。また、ご寄稿も歓迎いたします。内容は地域経済社会に関するテーマであれば、何でも結構です。詳細につきましてはお問い合わせ下さい（採用の場合、当財団の規定に基づき薄謝進呈）。

〒100 東京都千代田区大手町1-9-3 公庫ビル  
ほくとう総研総務部 NETT編集部 宛  
TEL 03-3242-1185(代) FAX 03-3242-1996

財団法人 北海道東北地域経済総合研究所機関誌

NETT

第10号 (1995.3)

編集・発行人：岩崎 昇

発行：財団法人北海道東北地域経済総合研究所  
東京都千代田区大手町1-9-3  
(公庫ビル5F) ☎100  
TEL 03-3242-1185  
FAX 03-3242-1996

禁無断転載

▽私たちはこの経済成長の末年において、バブルの崩壊と大震災というふたつの大きな崩壊現象に直面した。もしそのことに意味を求めるなら、バブルの崩壊は個人や家族を犠牲にした企業共同体への帰属が幻想であったということを知らしめ、大震災は行政という公への帰属が決して万全な生活を保障するものではない、ということを知らしめた（藤原新也、写真家、3月6日付朝日新聞より抜粋）。

▽今回の阪神大震災は、人々の人生観にまで影響を与えました。ふつ々の市民生活を営んで行くために何が最も大切か、政治とは、豊かさとは、といったことまでも含め、心を失った繁栄日本の価値観を、根底から問い直しているようです。

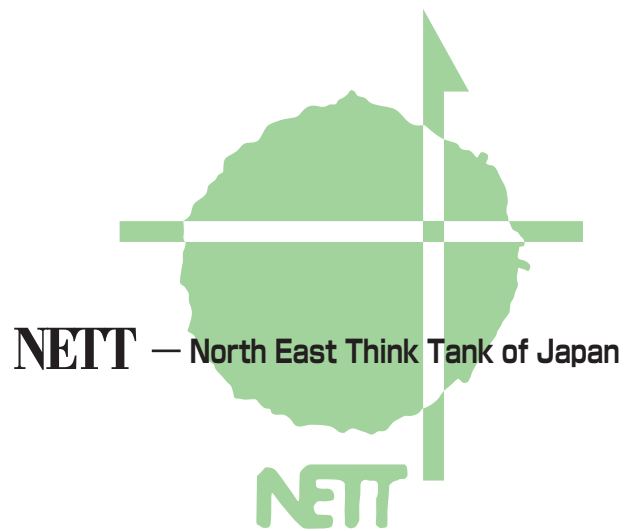
▽本号は「UJターン」を特集しました。大都市への一極集中が、危険の集中と表裏一体であるとの関係にある中で、近年生活のゆとりや生きがいを求めて地方にUJターンする人たちが増えてきています。その理由は、社会的・経済的事情等もさることながら、都市に対する潜在的な不安や自らの生命・財産を守るうとする動物的な本能に起因している面もあるような気がしてなりません。

▽国土庁からの委託で、当財団が全国的に募集した「UJターン体験記・提案」で優秀賞を受賞された4人の方々は、いずれも目的意識を持った個性豊かな人たちです。そして何事にも積極的で、その土地を愛し、溶け込む努力をしておられます。

▽人口減少に悩む地方自治体にあつては、阪神大震災を契機に、新たな視点でUJターン・地方定住を推進して欲しいものです。

（山口）





財団法人 北海道東北地域経済総合研究所  
**Hokkaido-Tohoku Regional Economic Research Institute (HRI)**

〒100 東京都千代田区大手町1丁目9番3号 (公庫ビル)

TEL 03-3242-1185(代) FAX 03-3242-1996